

“Separateness and Communication” / “Unity and Dispersity”
—George Eliot と Virginia Woolf が描く「個」と「集合体」—

目的とテーマ

本論文の目的はヴィクトリア朝リアリズム作家 George Eliot (1819-1880)と 20 世紀モダニズム作家 Virginia Woolf (1882-1941) という時代や小説技法の顕著に異なる二人の作家の間に潜在する、「個」と「集合体」に関する問題意識の共通性を論証することにある。

奇しくも、両作家はそれぞれ最後の長編小説において、近似するキーワードを提示している。それが表題に掲げた、*Daniel Deronda*(1876)における“separateness and communication”であり、*Between the Acts*(1941)における“unity and dispersity”である。筆者はこれらの語を両作家の著作に通底する問題意識を象徴するものとして捉えた。Eliot は一人の人間を社会という集合体の一員として外側との関連性に力点をおいて描く。一方、Woolf は人を取り囲む外側の要素を排除し、その人物の個としての内面に焦点を絞って書く。人物の描き方には歴然とした相違をみせる二人であるが、実はかなり似通った問題意識、すなわち、各人の「個」がいかにして自律を保ちつつ、同時に自らを取り囲む周囲の「集合体」と融合しえるか、さらには、そうした「個」と「集合体」の関係性が個人の人生や人間社会全体に対してどのような可能性を拓くのかという問題意識が著作の重要なテーマとなっているのだ。本論文では二人の作家に共通するこのような問題意識を基軸に据え、具体的には自我意識と社会的因習との葛藤、社会通念が固定化するジェンダー、階級、世代などの境界の超越、個々人の人生と人間社会全体の歴史との相関関係などに視座をおき作品分析を進め、両作家のそれぞれの見解の特徴を浮き彫りにすると同時に、二人の間に時流の変化を超えた作家としての精神的伝統の継承があることを証明する。

分析の方法

分析と論証を進める上で、Hannah Arendt (1906-1975)の公共論の一部を用いて議論の明確化を図った。人間が人間らしく生きるための条件として Arendt が掲げた主張の一部が、Eliot と Woolf の作品から読み解ける主張と基本的に一致すると考えられるからである。基本的には Arendt の著作から次の五つの理念を援用した。

① Arendt によると、「公的」(“public”)であることは人間らしくあるための必須条件である。この場合、「公的」は二つの意味を含む。一つは、人が他者に見られ聞かれて外に現れを果たすこと、もう一つは、人々を結びつけると同時に適度な距離を保たせる介在者としての「共通世界」が存在すること。このような二つの意味を含む「公的」であるが、そ

こから生じる複数性と多様性の重要さが強調される。

②「私的」(“private”)は「公的」の対極にあり、人間的な生活を送るために不可欠な条件が奪われていることを意味する。ただし、「私的」であることには「孤独」(“loneliness”)と「独居」(solitude)という二つの側面があることに留意する。「孤独」は他者から見られ聞かれることがなく、さらには自分自身を客観的にみるもう一人の自分もいない、人間の基本的条件である複数性が欠如した状態である。「独居」は現前する他者の存在はなくても自分自身との十分な対話が成立する状態であり、思索を深めるために時にはこの状態が求められる。

③「物語ること」(“story-telling”)、および芸術作品をとおしての「物化」(“materialization”)の意義。Arendtによると、人の私的経験や思考は、語られることによって、さらには芸術作品として「物化」されることによって客観性を帯び、他者と共有されて永続性を付与される。

④ Arendt によれば「社会」(“society”)は画一性を強要し、多様性を排除するものである。「社会」は人々に対して一つの大家族であるかのように一様にふるまうことを要求し、人々の個としてのアイデンティティの自発的な発露を阻む。

⑤ 私的領域と公的領域の枠の外に「親密性の領域」(“the sphere of intimacy”)が出現する。「社会」が私的な領域と公的な領域の古来の境界を曖昧にして人間の生活の多くを占めるようになったことと、個人主義の浸透によって私的な領域が充実したことが重なり、この第三の領域が意識されるようになった。

以上のような Arendt の理念を考察の補助線として用いた。

作品分析

本論文は3部6章構成とし、各部で Eliot と Woolf からそれぞれ1作品ずつを取りあげ同じ切り口から分析した。

第一部「社会通念と自己の現れ」では、社会通念と個人の自己認識、および自己表現の関係をテーマに Eliot の *Adam Bede* (1859) と Woolf の *To the Lighthouse* (1927) を分析した。家族や村社会、あるいは知人たち同士の集まりという身近な集団世界の中で年月をかけて人々の間に浸透した社会通念は個人の個我の自由な発散を阻む。そうした現実をいかに打破して、自己を外に向けて現していくか、という基本的な問題意識が2作家に共通する。

第1章 *Adam Bede* では、Dinah Morris と Hayslope の典型的な村民たちとの比較を通して、Hetty Sorrel の嬰兒殺しという事件をきっかけに露呈した Hayslope の地域社会の弱点が明らかになった。公的な領域では、男たちは〈社会〉が人々に課す画一主義によって無意識裡に自身を制約し、想定外の事態に直面した際柔軟に対応することができず無力であった。私的な領域では、対人関係や活躍の場がごく狭い範囲に限られた女たちに発想や思考の狭小さが目立った。中でも空疎な夢に耽り外に心を閉ざした Hetty の「だれにも見られず聞かれず」「だれのことも見ず、聞かず」の“loneliness”の状態は私的領域の孕む危険性を象徴するものとして注目した。いずれの場合も集約すれば、Arendt が最重視した〈多様

性〉が欠如していたということに尽きるだろう。対照的に、Dinah Morris が示した、一義的な社会通念に囚われない自由さ、差異を受け容れる心の柔らかさ、多様に対応する想像力と共感力の意義は際立つ。彼女は Hetty を始め、口を閉ざしがちな人々の心の闇に寄り添い、彼ら自身の〈物語り〉を引き出し、静かに聞いた。だれかに自分を物語ることに、聞いてくれる人をもつことは、人の苦悩を軽減し、前進を促す。「あらゆる悲しみはそれを物語として語ることで耐えられるものになる」という Arendt のことばを実証するような事例といえる。Eliot は、〈社会〉の画一主義や外の世界からの孤立などから生じた多様性の欠如を、自分を〈物語り〉、他者の物語を〈聞く〉という対応によって修正する道を示した。この過程を根底で支えたのが Dinah のもつ共感の力である。共感の力は、本論文において分析したすべての Eliot 作品の通奏低音を成すものであった。

第2章 *To the Lighthouse* では、ヴィクトリア朝社会の中で長年培われてきた理想的女性像である「家庭の天使」とそれに抗って自己認識と自己表現の道を探る女性たちの有り様を Mrs. Ramsay と Lily Briscoe を中心に、他の女性たちも交えながら比較分析した。「家庭の天使」の典型のように映る Mrs. Ramsay も、内面では周りに期待される夫人像と自分が真に望む女性像との間の齟齬に葛藤する。夫人の死後、彼女につながった女性たちの意識は変化するが、その変化の様相は、まず「家庭の天使」を踏襲する残像とよぶに相応しい状態、次に「家庭の天使」に反発しつつも新しい自分像を築くまでには至らない中途半端な状態、さらに「家庭の天使」を超えて自己実現に至った状態というように、大まかに三つの段階に分類できた。

Lily は、他の女性たちに比べ突出した飛躍を果たし「家庭の天使」から精神的に独立し、絵の完成を以て彼女なりの〈現れ〉を達成する。特に注目したのは、灯台に向かう Ramsay 父子を見送った後、Lily が Arendt の言う“solitude”の時を過ごし、ひとり静かに過去から現在までの Ramsay 夫妻との関わりを回想する場面だ。これは、Woolf が *A Room of One's Own* においてくり返し主張した、女性作家が精神的な独立を確保するためには、「自分だけの部屋」を確保しなくてはならないという信条に通じる。Lily は想像力を駆使して過去を反芻し、距離をおいて客観的に過去を理解しようとした。Woolf が「トンネル掘り」と呼んだこの過程は、Arendt の「過去を想像の中で反復することで、おのずと物語がみえてくる」という見解と重なる。過去の経験について距離をおいて多角的にみた際に、過去は現在とつながる意味をもって浮かび上がってくるということだ。Lily はこのようにして、「家庭の天使」を殺すのではなく、理解し包含しつつそれを超越し、自身に納得のいく自己像と人生のヴィジョンを構築することに成功した。Mrs. Ramsay が晩餐を通して一時的に創出した“a moment of vision”を、Lily は絵画に「物化」して永遠性を授けたといえよう。Woolf 作品では、この作品のように、人間の新たな可能性を切り拓く媒体として芸術作品が大きな役割を与えられていることが多い。

第一部で扱った2作品において、Eliot は共感力に、Woolf は芸術作品に人間の可能性を託す、という基本的な方向性が既に顕著であった。

第二部「到達する新領域」で扱った Eliot の *Romola* (1863) と Woolf の *Orlando : A*

Biography (1928) では、第一部と比べ、舞台のスケールは時間的にも空間的にも甚だしく広がる。分析の対象とした主人公たちは何度も移動をくり返し、その過程で、〈多様性〉を身につけ、小説の冒頭とは全く異なる独自の新しい生き方を切り拓く。

第3章 *Romola* では、16世紀のフィレンツェの町の私的領域と公的領域の対比に注目し、両領域が人々の人生にどのような影響を及ぼすのかを登場人物の実例を通して明らかにした。私的領域に関しては、物語前半の *Romola* を含め、Tessa や Bardi、Baldassarre をこの領域に身を潜める者と考えた。彼らはいずれも、世間からほぼ完全に孤立した状態で「見られ聞かれる」ことがない、存在を忘れられてしまうかのような、Arendt の言う「完全なる私生活の危険性」と隣り合わせの状態にあった。公的領域に関しては、大義名分を掲げ、雄弁さで公衆を惹きつけ力を得ていくことが当人の精神的墮落につながり得ることを、Savonarola や Tito が例証した。*Romola* はこの二つの領域を往還、さらにペストの村への漂着と、移動を繰り返しながら、多種多様な人々の生き様に接し、多様性の認識、他者の痛みを直感的に理解、共感する力、自身の倫理観に基づく客観的判断力を身につけた。公/私の領域の欠点を知り尽くした上で、*Romola* が最終的に独自の価値基準で築いた居場所は、Tessa 母子や叔母との共同生活の場であった。筆者は、これを Arendt が公/私の領域の枠外にある領域として位置づけた〈親密性の領域〉に匹敵するものだと考える。友愛の信念に基づいた *Romola* の新しい家は、人間同士の共感の力への Eliot の期待を表象するものだろう。

第4章 *Orlando: A Biography* は、400年という長大な時間とイギリス内外の広大な空間を舞台とし、ジェンダー、階級、職種、民族など様々な既成枠の越境、および公/私の領域の往還を含む、比類なくスケールの大きな移動の物語である。この移動は、帰属の曖昧な *Orlando* のアイデンティティ追求の旅であった。*Orlando* は公私の両領域から様々な制約を受けてはそれに対抗し自己の自由な発散を試みた。また広範囲に亘る時代と場所の移動によって、多種多様な人間や文化に接し、人生のあらゆる側面での多様性を体感する。その上、男性から女性への性の転換が身に起こり、男女双方の立場や視点を理解し、男性性と女性性を併せもつようになる。このように特異な経験を積んだ *Orlando* は、男性中心の論理によって築かれてきたイギリス社会にあってアウトサイダーとしての精神的立ち位置を確立する。やがて Shelmerdine と結婚するが、この結婚は夫妻の性別さえ曖昧な、互いを束縛しない緩やかな関係を保つ新しい形の結婚であった。この個性的な結婚を契機に、*Orlando* は *Romola* が最後に到達した〈親密性の領域〉に類似する新しい領域を形成したと考えることができる。この〈親密性の領域〉については、人間の内面まで支配しようとする〈社会〉に対する反発から生まれた領域であるという Arendt の見解に加え、人間性の形成が行なわれる「教養の場」であり、また客間を通して社交にも開かれ「文芸の公共性へと発展する端緒としての場」でもあるという Habermas の見解も併せて検討すると、*Orlando* が最終的に到達した居場所を〈親密性の領域〉と呼ぶことは妥当である。なぜなら、*Orlando* は精神的な自由と安定を得たばかりでなく、詩作に専念して長年の課題であった詩を完成させ、その公表と共に彼女の詩作は公的な活動に発展するからだ。Woolf は時代に翻弄されない精神的静謐が文学者にとって重要であると強調したが、*Orlando* にこのような形で精神

的静謐を与え、詩人として目標を全うさせた。

以上のように、第二部で扱った 2 作品の根底には、主人公が移動をとおして〈多様性〉を体得し、既存の公/私の領域の限界を知り尽くした末に、〈親密性の領域〉とよぶに相応しい独自の新しい領域を居場所として築くという共通のプロットが潜んでいた。この新しい居場所は、Eliot の作品では共感と思いやりに基づく社会的弱者との共生の場として、Woolf の作品では芸術活動の場として、個々人の個性が活かされる道を切り拓く足場となった。

第三部「分散した〈個〉から〈共通世界〉構築へ」では、国家や民族という大きな規模の集合体と個人との関係に主眼をおき、Eliot と Woolf のそれぞれ最後の長編小説である *Daniel Deronda* (1876) と *Between the Acts* (1941) を分析した。国や民族など大きな集合体の中でばらばらに分散した「個」をどのようにつなげていくかという問題意識が 2 作品に共通する。このことは、これらの 2 作品から引いた本論文の題目“Separateness and Communication” / “Unity and Dispersity” が表すとおりである。

第 5 章 *Daniel Deronda* は、Gwendolen と Deronda の個人的なアイデンティティの追求の物語とユダヤ人問題とを絡めた重層的構造になっているところに特徴がある。作品全体に通底する作家の主張がユダヤ国家再建を目指す Daniel Charisi の遺志“the strength and wealth of mankind depend on separateness and communication”に凝縮されているという観点から分析を進めた。“separateness”に関しては、Arendt が指摘したように“loneliness”という自己認識を阻むネガティブな意味合いと、“solitude”という自己との対話を促し確実な自己認識を進めるポジティブな意味合いとの正負両面があり、“communication”に関しては、他者との交流への偏重は自我を見失う危険性を伴う、という含意を前提として考察した。Gwendolen と Deronda は、精神状態が“loneliness”から、多種多様な経験を経た後“solitude”に移行したことにより、自身の個我と正面から向き合い自らの実像を認識するに至った。続いて彼らは、自身について〈物語る〉と同時に他者の物語を〈聞く〉こと、すなわち他者との間に均衡のとれた“communication”を築くことができるようになった。その結果、相違や多様性を受容し、外の世界と交流を続けながらも自分らしい生き方を貫くという形で Charisi の遺言の意図するところを個人レベルで実践したといえる。こうした一連の成長過程を支えたのは、自分のルーツに対する彼らの気づきだ。Gwendolen は母の家、Deronda はユダヤ人社会をルーツと認識し、それを土台として彼らの将来への展望は開かれた。

ルーツが人の成長と人生のあり方にとっていかに重要かということを経験を通してくりかえし主張した。Eliot は、過去に遡ってルーツを確認しそれを捨てないことが、個人のみならず、地域社会や民族、国家などの集合体の共通の基盤となって活力の源として働くと語る。では、作品の中でルーツと現実の人生との好ましい関係はどのように成り立っているのだろうか。本章では、共通のルーツをもつことを Arendt の「公的」の二つ目の定義である「共通世界」の存在と関連させて考えた。Arendt はこの「共通世界」を机に例えて人々を結びつけもするが分離もすると説明するが、本作品ではユダヤ人たちと Deronda がこのことを例証する。作品中のユダヤ人たちは、共通のルーツによって結びつけられて

いるが、各人の視座は異なる。例えばイギリス風土から受けた影響を切り捨てようとしないう Deronda は、Mordecai や祖父とは異なった立場からユダヤ民族の将来を考える。ルーツという共通世界を間に据えて、自己と周囲との間に適度な距離を保ち “separateness” と “communication” の均衡が確保されることに、Eliot は、人と人之間、民族と民族の間、さらには人間と歴史の間関係の可能性を託したといえる。

第 6 章 *Between the Acts* は、世界大戦の開戦直前という明確な時代設定がされている点や背景の社会情勢がかなり具体的に提示されているという点で Woolf の作品の中でも特徴的だ。国家や国際社会という大きな集合体が個々人の内面を浸食し、人々の生活が時勢の大きなうねりの中に巻き込まれざるをえない状況下にあつて、Oliver 家の人々は、それぞれ鬱積した不安や不満を抱えているが、それを外に発散するよりは、むしろ自分の殻の中に閉じこもり悶々と過ごしていた。人々の思いや言動は、“scraps, orts and fragments” と表現され断片性が強調される。パジェント会場に流れるグラモフォンの “unity---dispersity” という音声象徴するように、断片をいかにしてつなげるか、しかも、政治的プロパガンダや特定の宗教に頼るのではなく、小説家として何ができるか、これが *Between the Acts* に潜む Woolf の主要な問題意識であると考えられる。モダニズム小説の先鋒の一人として、「個」としての人間の内面を描くことをモットーにして小説家としてのキャリアを積んだ Woolf のフォーカスが、本作品では人をつなげることに移行した。

本章の後半では、劇作家 La Trobe のパジェントの特徴を明らかにすることによって、Woolf の目指す融合のあり方を探った。La Trobe のパジェントは従来型のパジェントとは次のような点で大きく異なる。まず、有名な人物や重大事象に焦点を当てた歴史劇の常識を覆し人々の普通の生活と感覚を題材にし、敢えて女王統治の 3 つの時代を選び出して劇に表すという新しい試みである。次に観客と演者との境界、舞台と周囲の自然現象との境界、人間と動物との境界など様々な境界を曖昧にし、その場に臨む人や物すべてを混ぜて巻き込む構成であった。さらに、一般的なパジェントに顕著にみられるパストラルへの回帰を謳うのではなく、原始への回帰を仄めかす。そして、劇作家自身は匿名性に拘り決して表に出ない。以上の特色から浮かび上がるのは、特定の偉人ではなく無名の多種多様な人々が階級や性別などによって分断されずに、そのままの姿で溶け合うようにつながって一つの物語を作っていくというイメージだ。そのつながりの根底にあるのは、原始の世界に象徴される人間にとっての根源的なルーツである。そして、この原始性には Woolf が文学のルーツであると考えた、「一音節の言葉」によって紡がれてきた無名の作者たちによる歌の存在が重ねられているのである。このような特色をもつパジェントだからこそ、観客たちは劇が描き出す歴史の世界について、異なった視点から異なった感想を言い合いながらも、同時に互いが同じルーツに根ざし歴史の流れの一部を成しているという感覚を共有する。人々の間に適度な距離を保ちながらも人々をつなげる〈共通世界〉がここにある。Arendt は〈共通世界〉では「一つの対象が多数の観客に与える諸側面の総計から生まれるリアリティ」が認められると考えたが、La Trobe のパジェントはそのようなリアリティを少なくとも瞬間的には生み出したといえる。Woolf は文学を通して、「個」の対立やつぶし合いではなく、「個」が活かされる共存の道を探った。今回のパジェントが生み出した

“unity” に持続性がないことを自覚した La Trobe は次作の構想を練り始めるが、その背後には、戦争という脅威の前で文学が果たすべき役割を追求する作家自身の姿がある。

このように第三部で扱った 2 作品では、個々人の内面は、身近な家族や周囲の人たちだけでなく、民族や国、国際関係など大きな規模の集合体からの影響を受け、登場人物たちは集団の中での自分の位置づけに困難を覚えていた。そのような状況にあった彼らのアイデンティティの確認と他者とのつながりの両方を支えたるのが、ルーツの認識であり、差異をそのまま受容し包含し流れ続ける歴史の認識であった。Eliot と Woolf は、作品においてルーツと歴史に関して近似する見解を示していた。

結論

「個」が独立性を保ちその特性を十分に外に向けて発散できること。「個」と「個」が互いにつながって、「集合体」の一部として全体を構成すること。6 章にわたる作品分析の結果、これら二つの目的を両立させる道がエリオットとウルフの作品を通じて一貫して追求されたことが明らかになった。二人の作家が示した問題解決への重要な鍵は、Arendt のことばを借りて表すと、見られ聞かれることや見て聞くことから得られる〈多様性〉を認識すること、私的な経験を〈物語ること〉や芸術作品に〈物化〉することによって他者と共有し永続性のあるリアリティへと昇華させること、他者との共通のルーツを認識し適度な距離を保ちながら〈共通世界〉を構築することにあった。

このように同じ問題意識に基づいて著作が進められたことは確かだが、エリオットとウルフを特徴づける相違点が浮かび上がったことも事実だ。個我を守りつつ周囲とつながっていく道を進む上で、その人が何を媒体としてその後の人生を切り拓くかという点において、二作家が重視するものに違いがあるのだ。エリオットは人間同士の「共感」の力が個人の人生はもとより人間社会の状況をよい方向に高めていくと期待する。本論文で取り上げた作品すべてにおいて、最終的に新しい人生へと踏み切る主人公たちを支えたのは「共感」であった。一方、ウルフの作品では人間の新たな可能性を切り拓く媒体として芸術作品が大きな役割を担う。本論文で取り上げた三作品では、絵、詩、劇に主人公たちが人生の可能性を託している。

エリオットとウルフの間には、著作の時代に半世紀の開きがあり、小説の手法も異なり、人間観、芸術観にも相違がみられる。しかし、それにも関わらず、二人の作家の間には、作家として、特に同じ女性作家として男性作家が経験しない社会的な障壁を乗り越えて書き続けた者同士、著作の底流に本論文で論考を重ねた共通の問題意識が脈打ち、またそれに対して作家たちが試行錯誤の末辿り着いた解決への道も基本的に近似していた。エリオットからウルフへと作家としての精神的な伝統が繋がっていることが作品分析を通して証明されたといえるだろう。そして、その繋がりもまた、歴史は個々人の小さな経験が共有され積み重なって紡がれていくという二作家の歴史観を証しする一例となるのだ。